

## 第2章 銃後

### 疎開生活② 「東京から静岡県へ」 さびしかった疎開生活

野村朋子さんのお話から

国民学校（現在の小学校）一年生の時、日本が戦争を始めました。まだ小さかった私には、戦争がどういふものなのかはよくわかりませんでした。戦争のことを考えるようになったのは、小学二年生の時でした。ある日先生が、「お友達のお父さんが兵隊さんになって戦争に行くことになりました。」と言いました。それを聞いた時、「自分のお父さんが戦争に行つて、死んでしまったらどうしよう。」と思ったのです。

○配給 米や味噌、砂糖等の食べ物などの物資を、生活の必要に応じ、平等に割り当てて配る制度。砂糖・マッチの切符製の導入が最初。米については、昭和十六年（一九四一年）に始まった。

○防空頭巾 空襲などのときに飛んでくる物や落ちてくる物から頭部を保護するために頭にかぶった綿入れの頭巾。

○軍需工場 戦争に必要とされる物をつくる工場のこと。

戦争が始まって一番驚いたことは、色々な物がなくなつてしまつたことです。戦争が始まつてからは、物を買うことがあまりできなくなり、配給が始まりました。お米や小麦粉、しょうゆ、みそ、塩まで、チケットのような券を持つていかないと、お金だけでは買えなくなつたのです。お母さんはご飯を炊くときに、芋の皮をむいて切つたものをまぜたり、トウモロコシを入れたり、大根や大根の葉っぱを入れたりしていました。小麦粉でおだんごを作り、それを汁の中に入れ、ご飯のかわりに食べるようにもなりました。

着る物も買えなくなり、お母さんは着物をほどこいてモンペを縫つたり防空頭巾を作つたりと、とても忙しくなりました。防空頭巾とは、中に綿が入つていて、ヘルメットみたいに頭を守る帽子のことです。やがて空襲で弾が飛んでくるようになり、まわりが火事になつたときに火の海から頭を守るために、防空頭巾をみんながかぶるようになりました。

やがてお父さんは、軍需工場で働く命令を受けました。軍需工場は、戦争で使う武器などをつくることです。私には女学校に通つていた姉が二人いましたが、女学校も休みになり、

軍需工場の手伝いに行くようになりました。小学生以外はみんな働かなくてはいけなくなつたのです。

小学四年生の頃には戦争が激しくなってきた、国は学童疎開を行いました。学童疎開というのは、小学三年生から六年生までの子どもたちを比較的安全なところへ引っ越しさせることなのです。お家の人と離れて先生と一緒にいっしょに行かなくてはならないのです。八月の終わりに、私と同じ学校の児童は東京の上野駅から汽車に乗りました。駅には、お母さんたちが見送りに来てくれました。もしかしたらお母さんにも会えなくなるかもしれないので、お母さんたちはみんな、「さようなら、さようなら、元気でね。」と手を振っていました。私のお母さんも、弟をおんぶして送りにきてくれたのですが、泣いたりしたらお母さんがさびしがると思って、元氣よく「行ってきまーす。」と手を振り汽車に乗りました。

静岡県の伊東というところに汽車が着き、そこで暮らすことになりました。疎開の時の荷物は、勉強道具のほかは持って行ってはいけなと言われていたのですが、お父さんが買ってくれた「夕焼け」という本と歌の本を内緒で持って



イメージ図

ぼうくうずきん  
防空頭巾

きたのです。友だちに見つかるとうたいへんなので、きちんとしまっておきました。戦争が終わって、こんなにおばあさんになっても、この本は大事に、大事に持っています。

伊東では、学校に行こうと思っても行けませんでした。伊東の子どもたちが入る学校しかなかったからです。ただ、うれしいことが一週間に一回だけありました。土曜日に伊東の学校の子どもたちが帰った後、その運動場に行き、体操やかっこをしたので。それが一番楽しかった思い出です。良い天気の時、先生が山に連れて行ってくれました。山では、枝を拾い、それを背負って持って帰ると、ご飯を炊くおばあさんが「うわあ、うれしいわ、これでまたご飯が炊けるわ。」と、とても喜んでくれました。でも、疎開してからは、昼間は元気なのですが、夜になるとお家のことを考えてしまい、さびしくてさびしくて、みんなで泣いていました。



がくどうそかい  
学童疎開

イメージ図



○B29 第二次世界大戦末期に活躍したアメリカ、ボーイング社製の大型長距離爆撃機。日本の空襲にはほとんどこの飛行機が使われ、広島・長崎への原爆投下にも使われた。

手紙を書いてお母さんやお父さんに読んでもらえばいいのではと思い、手紙を書くことになりました。先生から「さびしくなったことや、つらいことや、食べるものがあまりないことを書いてはいけませんよ。お家にいるお父さんやお母さんが心配をするから。」と言われたので、楽しいことを思い出しながら手紙を書きました。戦争が終わってお姉さんたちに会った時、「疎開生活は楽しかったでしょう。手紙には楽しいことばかり書いてあったよね。」と言うのです。本当は楽しくなかったけど、我慢していたのです。

そのうちに、町の上をB29が飛んできて、東京などを空襲するようになってきたのです。東京大空襲ではたくさんの方が焼け死んでしまいました。

そんなある日、お父さんが私を引き取りに伊東まで来てくれました。うれしくて、うれしくて、もう涙が出るほどうれしかったです。その後、家は空襲による焼夷弾に当たり、あつという間に焼けてしまったのはとても残念なことでした。

その後、私たちの家族は北海道へ疎開しました。北海道へ疎開してきて五日後に、太平洋戦争は負けて終わりました。戦争が終わったときに私は五年生になっていました。

思い返してみると、それからずっと戦争がなくて本当に良かったと思っています。これを読んでいるみなさんは、これから大きくなってお父さんやお母さんになります。そして将来、皆さんの子どもが生まれてくるようになります。だからこそ、戦争は絶対にしてはいけないと思うのです。

## DATA

平成20年度手稲区平和事業

聴き取り

- ・平成20年8月8日
- ・西宮の沢児童会館



野村朋子(のむら・ともこ)さん

- ・昭和10年(1935年)生まれ
- ・札幌市手稲区在住